コメント

木村一信

バンバンさん，ありがとうございました。

いまのバンバンさんの発表，たいへん興味深いことがらがたくさんありました。そちらのほうは，質疑応答を中心にしたいと思いますので，私からは簡単にコメントを最初にさせていただきたいと思います。

みなさんご存じのことばかり申しあげるのですが，インドネシアというのは2億2千万の人口がいて，世界で5番目という多さです。ですから日本よりはるかに大きなところで，日本とインドネシアのかかわりというのは17世紀からと言われています。これまでに，ずいぶん深いかかわりがあります。

私もインドネシアに住んで初めて，日本とインドネシアのつながりがこんなに深いものかとびっくりしたことがあります。走っている自動車の90パーセント近くは日本製なんですね。あれはやはり一番最初に驚きますけれども。

それから，以前よりは，かなり少なくなりましたが，いろいろな産業界においての日本の進出，それは非常に目を見張るものがありました。一時期は，日本における輸出入について，インドネシアの側に立ってみると，日本が輸出入の相手国としては第1位，第2位であったという。いまは少し変わっておりますが，インドネシアの日本にとっての意味というのは，意外に日本では知られていなかった。かかわった人は知っているわけですが。

そういう，日本とインドネシアとの関係の深さといいますか強さといいますか，そういったことの認識は，やはりものすごく大事ではないかというのが一点です。

それから近年，新聞紙上などで，既にご存じだと思いますが，日本の看護師不足ということで，最初にインドネシアから250人ほどの看護師さんが来られて研修を受けています。これは安倍首相時代に取り決めがなされたことです。

なぜ，インドネシアから最初に，と思うかも知れませんが。これもやはりこれまでの関係の深さ，強さにのっとっての判断ということです。これが他の東南アジアの国々にも広がっていくと思います。

これは，冗談ですが，私は，年齢が進んで看護師さんに見てもらうときにインドネシアの人だったらインドネシア語でしゃべると親切にしてもらえるのではないかと思ったりしているのですが。

それがまず，私たちの認識として，インドネシアというのは，日本にとって大きな意味を持つ国だということです。もちろん過去の日本軍政期のさまざまな負の遺産ももちろんあるわけですが，そういった歴史的なことに対しては（これは他の東南アジアの国々，アジアの国々と一緒なのですが）そういうことを認識したうえでのインドネシアとのつながりというものを認

識する必要があります。

図らずも昨年，2008年は，日本とインドネシアの国交樹立50周年記念の年だったわけです。それで11月にシンポジウムがありまして，私も招かれて講演をしに行きました。50周年という国交樹立の時間を迎えて，いまインドネシアと改めてその関係，日本・インドネシア関係史ということに対して，日本人は共通認識といいますか，そういうものを深めないといけないんだと強く思いました。日本の社会全体がです。あるいは人々，特に若者において，そういう気持ちをまず第一持たなければ，と思っております。

それから2番目に，いまバンバンさんから詳しく説明していただきました。インドネシアについての，特に外国人研究者の特権というようなことを言われています。外国人研究者でなければ指摘できない，あるいは気付かない，あるいは論理化して説明できないものがある。そういうことを具体的に，インドネシアにおける日本研究の独自性と普遍性ということで7項目にわたって述べられました。この点，非常に興味深かったと思います。

そのなかで，特に「日本的」という言葉が出てき，そういう「日本的」という言葉ですまされない，内実化していっている側面と，内実化しない側面もありますが，そういうところに関しての研究，これが具体的に述べられておりますので，ここに関してはおそらく，このあとのフロアーからの質疑応答がずいぶんあるだろうと思われます。

ちなみに立命館アジア太平洋大学が大分県別府市に2000年に開学して，現在，日本にインドネシアから正規の留学生として来ている総数が約1千400人ぐらいと言われているんです。その約1割にあたる学生すなわち，130名余りが，いま立命館アジア太平洋大学に在学しています。これは私たち立命館の人間にとっても非常に大事なことです。

ただ，東京大学など，大学院になると，やはり東大とか早稲田とか一部の大学に多い。しかし，それがあっという間に広がっていくだろうと思います。

付記

当日，会場において発表された内容と，いま私のコメントの前に述べられているバンバン氏の意見とは，ずい分の違いがあります。私のコメントは，当日の内容に即したものですので，十分な対応関係が成立していません。バンバン氏は，この度寄せられた原稿において，「日本研究の展望」について詳細かつ適切な見解を述べられていることをつけ加えておきます。